

**「地域防災力向上セミナー 千葉会場
(地域・学校防災教育セミナー)」実施状況**

日 時 平成26年11月19日(水) 11:00~16:10

場 所 千葉市文化センター アートホール

参加者 145名

1. 実施概要

京都大学防災研究所の林教授に地域と学校の連携による防災教育について、御講演いただきました。

また、命の大切さを考える防災教育公開事業（県教育庁事業）を実施した小中学校、高校及び特別支援学校の8校による事例報告の発表がありました。

発表後は、林教授による講評のほか、来場者との意見交換が行われました。

プログラム

No.	演 題 等	講師及び発表者
1	講演 「地域と学校の連携による防災教育」	京都大学防災研究所 教授 林 春男 氏
2	防災教育モデル事業事例報告	
	(1) 自他の命を守る防災教育 ～状況に応じ、自ら考え判断する態度の育成をとおして～	習志野市立袖ヶ浦西小学校 教諭 黒田 みのり 氏
	(2) 命の大切さを考え、よりよく生きる児童の育成 ～自助・共助の意識を高める防災教育を通して～	白子町立南白亀小学校 教諭 旦谷 明子 氏
	(3) 災害時に自主的に行動できる生徒の育成	袖ヶ浦市立長浦中学校 教諭 伊藤 弘己 氏
	(4) 命の大切さを考える力をはぐくむ指導方法の工夫 ～防災教育及び命を大切にす教育～	流山市立東部中学校 教諭 長妻 孝幸 氏
	(5) 地域に貢献できる生徒の育成を目指した防災教育の取組 一生徒の共助・公助を意識した避難所設営への関わり方	銚子市立第二中学校 教諭 溝口 康浩 氏
	(6) 地震と津波・地域ぐるみで防災を	県立九十九里高等学校 教頭 中村 道代 氏
	(7) 地域と連携した防災教育への取り組み	県立銚子高等学校 教諭 川上 悟 氏
	(8) 本校の防災教育の実践と福祉避難所開設に向けた地域との連携	県立松戸特別支援学校 教諭 諸伏 利家 氏
3	講演者による事例報告の講評及び質疑応答	講師及び発表者

講演『地域と学校の連携による防災教育』

京都大学防災研究所 教授 林 春男 氏

- 我が国では、毎年、地震や風水害等多くの異常な自然現象が発生しており、これらの自然災害による被害を軽減するためには、「自助」、「共助」、「公助」の取組が重要である。特に東日本大震災では、大規模広域災害時における「公助」の限界が明らかになった一方、「自助」、「共助」の重要性が再認識された。これをきっかけに、「自助」、「共助」の力を向上させる取組として、防災教育への関心が高まっている。

防災教育は、東日本大震災から始まったわけではなく、昔からの取り組みである。私も防災教育チャレンジプランの手伝いをして10年になった。2004年に、兵庫県が中心となりぼうさい甲子園が始まり、損保協会が音頭をとって小学生のマップ探検隊の取組を行い、それぞれ10年を経過している。それぞれが別の取組としてやっていくことで、一生懸命防災教育に励んでいる団体を顕賞する機会が増えるという考えである。

防災チャレンジプランは、これまで約200のプロジェクトを支援している。どのような支援を行っているかという点、実践をしていただく方と一緒に1年間プログラムを磨いている。応募期間を含めると約2年程度かかる。毎年15程度採択し10年続けてきて、200近くの実践事例がたまった。事例は、ホームページでも全て公開しているので、これから防災教育をやっていこうと考えている方は、自分達に良く似たプロジェクトを参考にして、防災教育に取り組みやすい環境を提供できればと思う。

- 10年が経過し、次の10年を目指す新しい取組ということで、「地域における防災教育の実践に関する手引き」を作成しており、最終の作業に入っている。

この手引きは、防災教育を始めるに当たり何から始めて良いか分からない、活動のための資金や知識がない等の様々な課題により、地域の防災教育の取組が進まない事例があることから、地域の防災教育の一層の取組を支援することを目的に、全国各地域で先進的に実践されている優秀な取組から得られる知見を整理し、取組のプロセスで生じる様々な検討課題を解決するためのヒントを示すものとなっている。

また、手引き作成のもう一つの目的として、来年3月に仙台市で第3回目となる国連の世界防災会議が開催され、世界各地から様々な分野で防災に携わる方々が集まる機会に、防災教育を日本から発信することである。

- この手引きが考える防災教育の目的は、地域に属する一人ひとりの防災意識の向上や、地域内の様々な立場の方が連携を図ること等により、地域防災力を強化することにある。地域防災力とは、2つの側面がある。1つ目は災害を起こさない、未然に防ぐ「予防」の力である。2つ目は、万が一災害等が発生した時に被害を最小限に留め、速やかに復旧・復興ができる発災後の回復力である。この予防力と回復

力を併せたものを、地域防災力と考えて強化していくことを目的としている。

そのためには、地域が見舞われる災害への知識、災害にどのように対応するのかという知識、皆で災害に立ち向かおうとする態度、安全な避難や的確な救急救命等の行動がとれるだけの技能を普段からバランスよく育成していくことが重要となる。



- 防災教育を進める上での5箇条を、手引きの中では大事なことと考えている。
 - ①居住する地域の特性と問題点や、過去の被災経験を知ること。難しい話から始めるのではなく、自分の地域を知ることから始めようということである。主体性・実効性を考慮し、関係者の中で合意を得て、防災教育を推進していく担い手は必要になる。
 - ②まずは行動し、身をもって体験すること。頭だけで考えるのではなく、まずは行動から始めようということである。理屈を捏ねて、出来ない理由を探さず、まずは実行・行動をしてみて、感じたことを示していくことである。
 - ③身の丈に合った取組をすること。気張らずにできることから始めようということである理想・目標を掲げることは非常に大切だが、無理に色んな資源を引っ張ってこようとせず、今あるものから、自分達を取り組めるところから始めようと考えている。
 - ④一人では出来ない。様々な立場の関係者と防災教育を種に交流を図ることを大事にしてほしい。色々な人と触れ合うことで、知見やノウハウが手に入り、連携が具体化していく体制ができることで、活動がより充実していくと考えている。
 - ⑤明るく、楽しく、普段から気軽にスタートすること。決して災害は楽しいことではないが、必要以上に悲しくなったり、悲観的にならないようにしようと考えている。防災を楽しむことと結び付けて、日常生活の中でも気軽に継続できる取組になってほしい。
- この基本方針を考えた時に、防災教育を進めるには5つの要素を考えていく必要があると思う。手引きでは5つの要素について、具体的な実践例を紹介している。
 - ①人である。「担い手」と「つなぎ手」である。「担い手」とは推進する主体を指し、学校の先生や地域の防災リーダーになることが多い。他にもう一つ大事な要素として、「つなぎ手」がある。「つなぎ手」とは色々な立場の人をつないでくれる人を指す。防災教育で困っていることなどの相談を受けて、この人に相談したら良いと紹介してくれるコーディネーターの役割を果たしてくれる「つなぎ手」は、「担い手」と同じように重要な役割を担っていると考える。

千葉県は防災教育チャレンジプランにも継続的に応募をしてくれる珍しい県だ

と思う。それは、推進校が毎年色んなところから選ばれ、その推進校になった学校がもう1年やってみようと、チャレンジプランに応募してくれる。なぜかという、教育委員会と県の防災部門が協力しており、これは他の都道府県にはあまり見られない千葉県の特徴だと思う。教育委員会はどちらかという「担い手」を供給しているが、防災部門は「つなぎ手」に徹していると思う。防災部門が、教育委員会あるいは学校の先生方を直接、間接的に支援している形が「つなぎ手」として存在していると思う。

②組織と体制である。一人の努力で防災教育をやろうとすると、その先生が異動すると、防災教育が途切れてしまう。例えば、東日本大震災の時に大変有名になった釜石の奇跡という話がある。釜石東中学校が舞台になったが、その時にプログラムを一生懸命開発した副校長先生が別の学校の校長先生になり、もうその先生はいない。賞などを受賞すると、半年から1年ずれて表彰されることが多いから、その後の校長先生が表彰式に出席し、質問されても答えられない。個人でやると、個人がいなくなることで終わってしまいかねない。継続するためには、やはり組織や体制が必要になる。これを踏まえると、千葉県の取組が継続して行われているのは、組織づくり、体制づくりがしっかりしていると思う。

③時間と場所と機会である。この3つが揃わなければ、防災教育は実行に移すことができないので、非常に重要な要素になる。

④資金であり、経費である。学校の先生方から話を聞くと、何か新しいプログラムを作ろうとすると、30万円位あると実行に移しやすいとのことだったので、チャレンジプランも気持ちは30万円を支援したいが、財源が乏しく、その半分も出せない状態が続いている。どこからか資金・経費を調達する仕組みはどうしても必要になってくる。

⑤知識であり、教材である。

人がいて、組織があり、時間・場所・機会があり、資金があり、ネタがあることにより、防災教育は展開していく。だから、防災教育を始めようとしたら、この5つの要素について考慮していただく必要があると思う。

- 防災教育を進めていくには、4つの段階がある。構想段階、準備段階、実行段階、継続段階である。今日の午後は、この実行段階の成果の話していただくが、それに先立つ構想段階や準備段階があったことは間違いないし、今年の発表を来年以降に継続していただく継続段階、この4つの段階について、手引きとして、全部で25のポイントを考えた。この25のポイントを1つずつ



ぶしていくことによって、防災教育が形になっていくと考えている。構想段階で5つ、準備段階で9つ、実行段階で8つ、継続段階で3つを順番に紹介する。

- 構想段階は、誰が、何のために、誰に対して、何を、いつ、どこで、どんな形で教えるのか、という問いを詰めていくのが、構想段階である。

誰がというのは、担い手である。これを決めなければいけない。

何のために、これは非常に重要であり、防災教育の目的あるいは目標を具体的にすることは大切なことである。一般にスマートゴールと言うが、S・M・A・R・Tと5つの成功するための、目標設定にポイントがあると良く言う。Sとは、具体的である。英語で Specific のSとなる。Mとは、測れる、測定できる、数えられる。Measurable のMである。Aとは、ちょっと頑張れば実現できる。Achievable。Rとは、現実的だ。Realistic。Tは、時間に関わることで Time。そういう具体性があり、測れて、ちょっと頑張ればできるような、非常に現実的な目標を考える。この目標を明確にすればするほど、後の工程が簡単に考えられる、作りやすくなっていくと思う。

当然、教育を受ける人達がいるので、誰に対してというのも一緒に考える必要があると思う。

何をというのを考えると、実現すべき目標が考えられる。

防災教育というのは、チャレンジプランの話をする、3種類の皆さんがお出でになる。人の種類で分けると、音楽でいうと演奏者と作曲者に分けられるかもしれない。作曲者とは、新しい防災教育の種を開発する方である。今までにない新しい防災教育のネタを見つける方達がいる。その方達にやっていただく作業は学校でいうと、1コマ位のものを作っていただく。そういう作曲者のような方がいると同時に、大部分の防災教育チャレンジプランの参加者は、演奏者のような方達である。演奏者には2種類の方がいる。1つは、学校という場で色々なプログラムを考える方である。多くの場合には通年又は半年の時間を使って、色々な要素を散りばめた科目を作るようなタイプがある。もう1つの演奏者は、地域のリーダーが中心になり、だいたい1泊2日位あるいは1日のプログラムを作っていただく。その時に地域と学校が連携する形で、子ども達に色々なプログラムを体験してもらいイメージである。そういった長期間で実施するやり方と、割と短期間の間に集中的に濃密な時間を過ごすやり方、どのようにということ言えば、2つの大きな演奏の仕方があると思っていただけたらと思う。

- 構想段階には5つのポイントがある。
 - ・ 担い手を決めること。誰かが手を挙げて、私がやると言っていたかないと先に進めない。
 - ・ 主体者と参加者の負担を出来るだけ減らすこと。1人の先生が全てを担うのでは大変な作業量になってしまう。そういう意味では、出来るだけ小さい規模で始め

て、プログラムを広げていくのが良い。チャレンジプランのホームページを見ると様々なネタがあるので、活用していただくのも良い。

- ・活動の場所を確保しなければならない。学校で実施するのか、地域か、家庭か、どこかの現場か、場所を決めないと内容が充実しない。
- ・災害への知識・防災対策についての知識・危機管理等への知識を手に入れること。自分で勉強するよりも、防災の専門家と一緒に活動をすると考えてほしい。
- ・教え方に関する知識を得ること。これもチャレンジプランのホームページを見ると、色々な教え方のコツ等も得られる。

○ 準備段階は9つポイントがある。

- ・キーパーソンと連携すること。これは非常に重要な要素である。それぞれの地域で、防災の重要な役割を担っているキーパーソンがいると思うので、そういう方と相談し、逐次、情報を手に入れていくことが大事である。
- ・アドバイザーを確保すること。公の防災関係機関等では、防災のアドバイザー制度等もあるので、課題解決のために活用してほしい。
- ・活動を個人のものにしない、組織化を一生懸命図ること。関係者で集まり、組織名、役割分担、連絡体制、活動計画を作成していくことを進めてほしい。
- ・活動の後ろ盾となる組織を取り込むこと。行政機関、地域住民団体、ボランティア団体等の地域で活動する様々な団体に協力を依頼してほしい。
- ・今までのことを踏まえて、活動のための準備・調整時間を担い手の皆さんに確保していただく必要がある。担当者の空き時間を活用して、それぞれの得意分野を無理のない範囲で分担できるように準備、調整を行ってほしい。
- ・準備段階で特に大事なことだが、地域が持っている特性、災害の履歴、地域の脆弱性について、知識を得ること。地誌、歴史に詳しい研究者や災害経験者等の話を若い方と共有してほしい。
- ・既存の教材を活用すること。インターネットで検索すれば、色々な機関の情報が簡単に得られるし、そういう公開情報をヒントにして、対象者やテーマに応じた教材を作っていくことを薦める。
- ・地域や目的に応じてプログラムの工夫をしてほしい。基本は既存の教材を使うとしても、それを地域、対象者、目的に合わせて、ひと手間かけていただければと思う。そして防災だからといって、いつも厳しい顔をして行うのではなく、どこか活動に遊びの要素を加えていただけたらと思う。扱っているのは災害かもしれないが、ひと手間加えることで、色んなところに遊びの要素が加わり楽しいプログラムになると考える。
- ・資金を確保すること。色々探していただくと、助成金、補助金、懸賞金等があるので、まずは応募してみることも良いと思う。また、資金援助等をしてくれるスポンサーを探すことや、防災教育モデル校に応募することも良いと思う。そして最

後は事業化を図ることを検討していただきたい。

○ 実行段階は8つのポイントがある。

- ・まずは地域内の色々な関係者を巻き込んだ活動をしてほしい。学校と地域が密になり、いきなり連携してやろうとするのも難しいので、その当日だけでも地域の方に参加してもらっただけでも良いと思う。そして少しずつ、自治会、子供会、老人会、自主防災組織、消防団、学校等の地域を支える団体が連携し、フェイスツーフェイスのコミュニケーションが可能なコンパクトな人脈を形成していくことが大切だと思う。

上手くいく団体は、マスコミの使い方も非常に上手である。地域で子ども達が頑張っているのは、マスコミとしても喜んで報道したいネタである。マスコミを上手く利用し、地域ニュース等で取り上げられることで、次のポイントでもある地域の人から活動に対する理解、賛同を得やすくなる。直接話をすることも大切だが、地域の方に自分達の取組を積極的に発信し、理解を得ていくことも重要だと考える。

- ・時間と場所と機会が必要になると話したが、それらをどう確保するかということと、外部の方との交流の機会を確保することが非常に重要になる。全ての会議等に地域の方が参加することはないが、ここぞという時に参加できるようにしてほしいと思う。また、東日本大震災からは、被災地の子ども達が被災地以外の県に来て交流する機会や、被災地以外の県の子ども達が被災地を訪問して交流する機会など、他の主体との交流も行われているので、色々な交流ができる環境を作っていくことも大切だと考える。
- ・経費についても、公共施設等の無料の場所を利用したり、無償のボランティアに協力を依頼するなどの経費を減らす工夫をすることで継続へとつながっていく。

○ 今まで話した活動を継続するためには、3つのポイントがある。

- ・継承者を育成すること。いきなり後任者に全てを任せるのではなく、一緒に少しずつ実践する中で、役割を引継ぎ、担い手を継承することも考えてほしい。
- ・外部に周知・啓発することで、プログラム等が波及していく。
- ・知識やノウハウを継承するために、活動の手順やマニュアルを作成すること。

○ 25のポイントを話したが、ここからは皆さんが地域の中で、担い手を決めて、防災教育が根付いて花が咲くようになることを祈念する。



防災教育モデル事業事例報告

学校種に応じた地域との組織作り、防災訓練、防災教育の実践の取組が下記のホームページで紹介しています。

URL : <http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/anzen/saigai-anzen/index.html>

千葉県ホームページ：ホーム > 教育・文化・スポーツ > 教育・健全育成 > 学校教育 > 安全・保健・給食 > 学校安全 > 災害安全



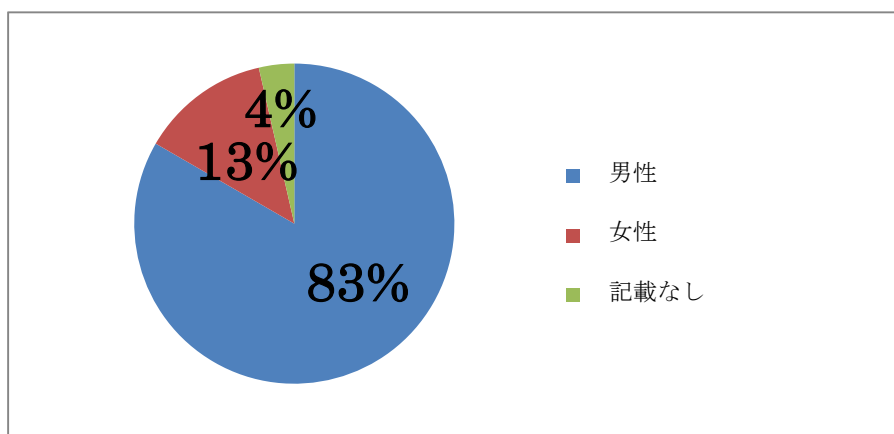
2. アンケート結果

「地域防災力向上セミナー 千葉会場」の参加者に対して、今後の参考とするため、セミナーの内容等について、アンケートを実施しました。

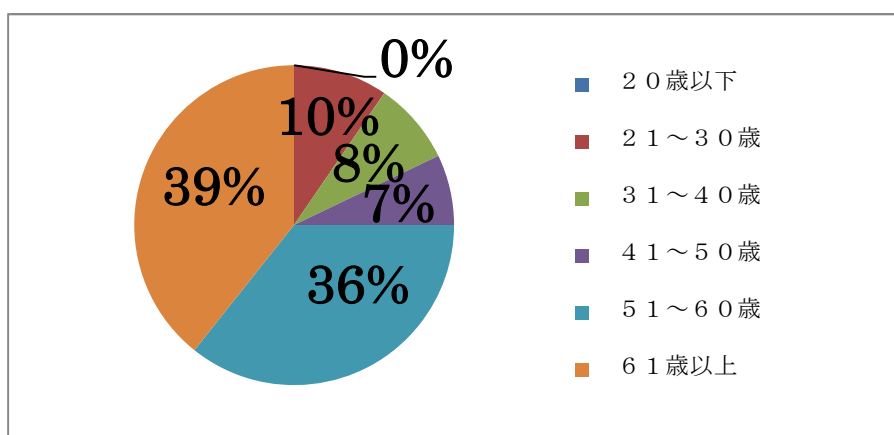
主な結果は以下のとおりです。

(1) 参加者について

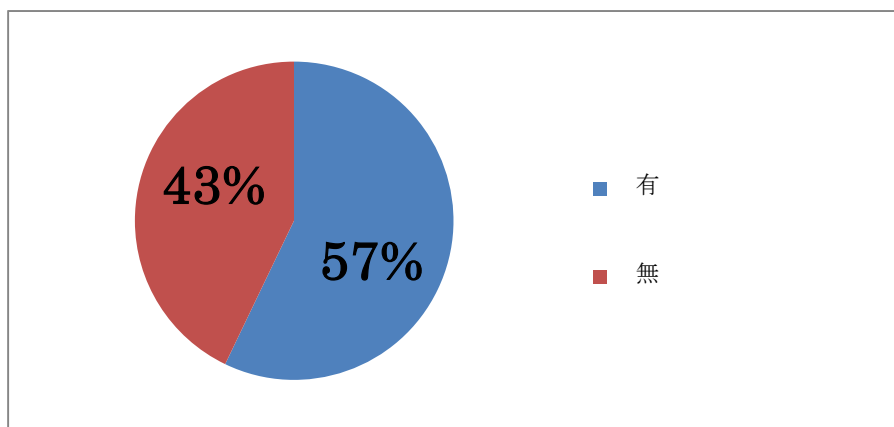
ア 性別



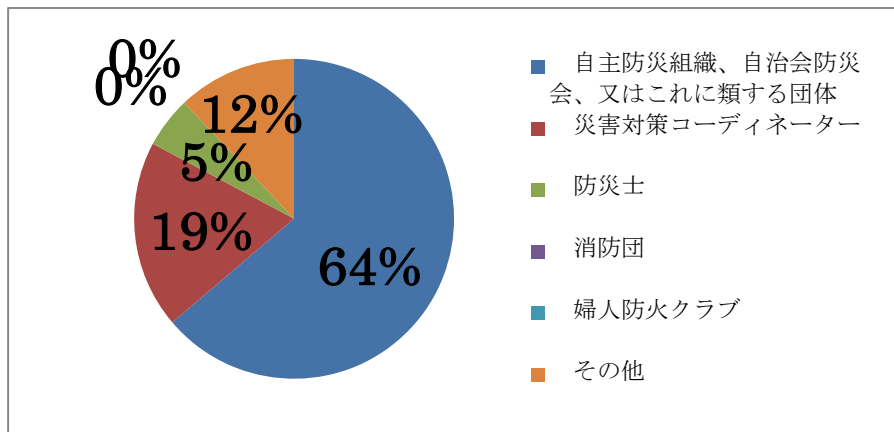
イ 年代



ウ 防災に関する組織への加入状況等

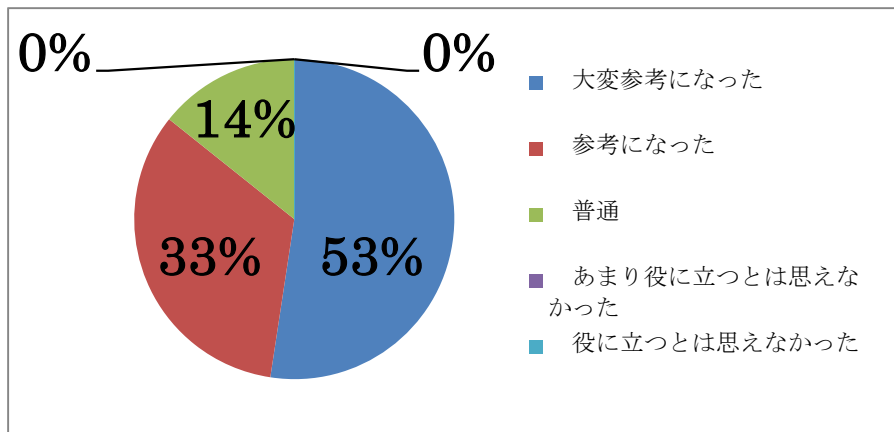


有の場合、加入している組織等（複数選択可）



(2) セミナーの内容について

ア 講演



イ 防災教育モデル事業事例報告

